

種名	<u>ブルーギル</u> <u>Lepomis macrochirus</u> 
分類	サンフィッシュ科ブルーギル属
俗称	ブルーギルサンフィッシュ(別名)
形態的な特徴	体高が高く背鰭、尻鰭が大きい。鰓蓋後方の突出部が濃紺で目立つ。体色は全体的に青みがかった黄緑色で7～10本の暗色横帯が入るが、成長によって不明瞭になる。幼魚期では体高が低い。全長は25cmほどになる。産卵期のオスには鰓に淡青色の帯と腹部に黄色からさび朱色の鮮やかな婚姻色がでる。
分布	原産国は北米東南部で、1965年に寄贈されたものを伊豆半島内で放流したのが始まりで、各地にその子孫が分布を広げ、現在では湖沼やため池を中心として日本各地に生息する。
繁殖行動	産卵期は6～7月で、砂泥底にすり鉢状の巣を掘り、そこに産卵する。産卵後オスは巣の周りにとどまり、卵、稚魚を保護する。
生息場所	湖沼や流れの緩やかな河川の水草帯など、障害物の多いところに好んで生息する。オオクチバスと同様に日本各地の農業用のため池などに生息している。
食性	エサは浮遊動物、水生昆虫、甲殻類、水生植物などで、産卵期には魚卵や小魚も食べる。
生息環境への配慮事項	外来種である本種はオオクチバスと同様に日本各地へ移入され分布を拡大している。オスが卵や稚魚を保護することによって着実に数を増やし、魚類だけでなくその他の水生昆虫や甲殻類などの在来種への影響も心配される。現に本種しか生息しないため池もあり、魚食性の強いオオクチバスと魚卵や稚魚を食う本種がともに定着している水域では小魚からエビ、昆虫に至るまでの在来種が生息し続けることは困難である。本種が定着したことにより、在来種が駆逐され、これらの生息に大きな影響が出ている。オオクチバスほど貪欲なわけではないがあらゆるものを食べ、繁殖力が強いのでモツゴやハゼ類などの在来魚が生息していた生息環境に本種が定着している。琵琶湖などの大きな水系では環境が多様化しているため本種を含めたくさんの種類の生物が生息しているが、閉鎖水域での水域環境や野生生物への影響が懸念される。どの水域においても外来種である本種が定着していない環境が望ましい。
引用文献： http://www.maff.go.jp/nouson/mizu_midori/menu/main.html を改変	